

2018 年度千葉商科大学地域志向研究活動助成金共同研究

「市川と本阿弥光悦—なぜ光悦は中山法華経寺に分骨されたのか—」研究報告書

共同研究 代表 枅岡 大輔

1.研究概要

本研究は、市川・中山法華経寺と京都・本阿弥光悦のつながりについて調査したもので、主に文献研究及びフィールドワーク・インタビューによる聞き込み等をまとめたものである。

詳細は、研究成果としてまとめた別冊子『市川と本阿弥光悦—なぜ光悦は中山法華経寺に分骨されたのか—』を参照されたい。なお本紙では同冊子掲載の研究メモに加筆修正を加え報告する。

結論的には、中山法華経寺にある本阿弥光悦の墓碑は供養塔として建てられた可能性が高く、それが実際に「分骨」されたか否かについては、事実調査としては以下に見る諸理由によってついにその事実は確認することができなかった。

しかし、本研究の目的は、端的に光悦分骨の事実を証明することではない。

中山法華経寺最古に類する墓碑として本阿弥光悦と一族の供養塔(分骨墓)が残されており、本家九代光室の発願により前田家寄進によって建立された五重塔や光悦筆による扁額の数々、光悦の孫・光甫による日蓮上人御真筆の装丁補修の保存等、本阿弥光悦・一族と中山法華経寺との結びつきは非常に深い縁起を持っている。その痕跡の背後に秘められた本質に触れるべく、我々は光悦とかかわりの深い方々とお会いし、大変貴重なお話の数々を伺った。

また幸運なことに、大正 5 年以降行方不明とみなされていた光悦直系の子孫がご健在であることが判明し、面会の機を得、さらには中山法華経寺の本阿弥一族墓碑への墓参りに同行させて頂くことができた。ご本人にとって、これが初めての中山法華経寺への訪問である。本研究を機に、新たな歴史の一ページが刻まれたその証左といっても過言ではないだろう。

本研究を通じて、市川に残された本阿弥光悦と一族の軌跡に込められた祈りとそのあたたかなところに、ほんのすこし、触れることができたかも知れない。

だが、その価値は調査結果として報告した記述のみに求められるものではない。むしろ、記述の眼目とするところにこそあるのである。

記述をたどり、ここに触れるまなざしで道を歩くなら、誰でも、今日へとつづく深い縁を知ることができる。そのところの出会いをさまたげるものは何もない。人々の想いは、そうして、場所に、言葉に、物に受け継がれ、それぞれの胸に結び合わされていく。その妙にこそ、本研究の本義がある。

2. 「市川と本阿弥光悦」研究メモ

2-1. 中山法華経寺と本阿弥家のつながりについて

中山法華経寺は千葉縣市川市中山に所在する日蓮宗の大本山である。江戸時代、中山法華経寺の貫首職は京都の本法寺、頂妙寺と堺妙国寺の三箇寺の住持が輪番で務める「三山輪番制」によって維持されていた。本法寺十世の功德院日通や十二世の正教院日慈など、光悦と親交のあった本法寺の住持も一代おきに中山法華経寺に晋山している。

本阿弥一族の中からも^{にちいん}日允のような僧侶が出て、菩提寺である本法寺から三山輪番制によって中山法華経寺の貫首となった例があり、彼らによって本阿弥家は中山法華経寺との結びつきを強めたと考えられる。

近世初頭において、中山法華経寺は本阿弥家外護の寺であった。現在、国の重要文化財に指定されている中山法華経寺の五重塔は、元和八（一六二二）年、本阿弥本家（三郎兵衛家）の当主光室の本願により、加賀藩主前田利光（寛永六年四月二十三日に肥前守となり、名を利常と改める）の寄進によって建立されたものである。正保年間には光悦の孫で日允の兄・光甫が同じく利常の寄進を得て、中山法華経寺が所蔵する日蓮真蹟の巻軸に修補を加えており、一族の信仰の深さを伺い知ることができる。

2-2. 中山法華経寺の本阿弥光悦分骨墓及び本阿弥家歴代墓碑について

中山法華経寺の境内にある墓域の最奥部、歴代貫首の墓所に続く石段の下に、左右に分れて本阿弥本家の墓碑と分家にあたる光悦の墓碑が建てられている。本家の墓碑のうち一番大型のものは、中央に「本阿元祖常親院妙本日忠」と彫られ、その両脇に本妙、本光など歴代の法号が彫られている。これらの墓碑について、大正十五年に光悦會が刊行した『光悦』には次のように記されている。

「本阿弥墓碑の法華経寺にあるものは、高さ一丈有余尺のもの一基、凡九尺のもの二基、五六尺のもの二基、三四尺のもの十二基計十有七基を数ふ」「翁（光悦）の碑の法華経寺にあるものは、一基の碑なれども甚だ小さく、而も後方にあり、加ふるに苔むし傾きたれば平常詣者の眼を惹くことなかるべし」（前掲書 三二四～三二六頁※括弧内は補記）

さらに、昭和十七年、東京名墓顕彰会が刊行した雑誌『掃苔』誌上で、^{そうたいか}掃苔家の鶴田勢湖は本阿弥家の墓碑を次のように紹介している。

「光室の子、十一代の光温が、法華経寺に本阿弥歴代の供養墓碑を建てた。これはあまり世上に知られてゐない。法華経寺境内の東位、墓域の突當り、石段下の左傍に苔蒸した板碑式の巨大な三墓が西面してある。その右端のものは総高八尺（臺石二段）彫られ

である文字を判読してみれば、本阿弥家始祖以来、十代光室までの法諱、卒年月日であって、本妙と妙大は卒年がないところからみると、判然としなかったものとおもふ。碑面右端の光温の諱号卒年月は、後に彫り入れたものとおもはれる。その下方に、同じく光温の法諱が重複して彫ってあるのは、この供養墓碑を建てたことを物語っている。

(中略) この三基のものについて、歴代のものは供養のために建てられたものであるが、左位二基の光温と光達については、墓碑と見做すべき乎、否やは考察の余地があるので、これは後日の考証にゆづりたい。」(『掃苔』三〇一頁)

またさらに、昭和五十六年、日蓮の七百遠忌を記念して中山法華経寺が刊行した『中山法華経寺誌』によれば、同墓碑は次のように記される。

「歴代墓地に上る石段の左側に、江戸時代の芸術家として名高い、本阿弥光悦一門の墓碑がある。正式には供養塔であり、碑面には歴代の法名が連記されている。中山法華経寺の墓碑としては、これがもっとも古いものといえる。中山法華経寺の境内地を画するこの堀にそった外側に墓地が営まれるようになったのは、恐らくは江戸時代初期のことであろう。」(前掲書 四八二頁)

現在、中山法華経寺にある本阿弥家の墓碑は、光温が建てたと思われる数基の墓碑と、光悦の「了寂院光悦日豫居士」という法号が彫られた墓碑を確認できるのみとなっているが、鶴田の説や『中山法華経寺誌』の記述によれば、光悦と本阿弥家の墓碑は分骨墓ではなく、先祖との結縁や供養を目的として建てられた「供養墓(塔)」である可能性が高いといえる。

右の墓碑のうち、三基は昭和三十六年に市川市によって重要有形文化財に指定されており、光悦の墓碑はその後、昭和五十四年に「通本」の扁額とともに、追加指定されている。

われわれは光悦が京で亡くなったのち、鷹峯の光悦寺(光悦寺は光悦の没後に建てられた)に葬られた遺骨が、本阿弥家(次郎左衛門家六代光通)の江戸移住に伴って法華経寺へ分骨された可能性がないかどうか、両寺のご住職に伺ったが、これに関する記録は残されておらず、あるいは不明であった。なお、中山法華経寺については、昭和十八年に不慮の災禍で庫裡を全焼しており、その折、江戸時代初期から書き継がれた『紺表紙』とよばれる日鑑(日記)を焼失していることから、光悦の遺骨が果たして中山法華経寺の墓に分骨されたかどうかという事実については、ついに真相を明らかにすることはできなかった。

2-3. 光悦の関東下向と中山来訪について

寛永二年十一月二十六日、光悦の甥にあたる本家の当主・光室が、江戸城中で中風の発作にみまわれ急死してしまう。光室の悲報を知った光悦は、年若い光室の倅(又三郎)の跡目のことを「こころ元なく」思い、急ぎ旅支度を整え、懇意の間柄であった京都所司代板倉周防^{すおうの}守より、將軍の側近土井大炊守^{おおいのかみ}にあてた書状を預かり「十二月中旬京を發足、同二十七日」

江戸参着という早さで、大炊守の元を訪れている。この時、光悦は將軍への手土産を持参しなかったが、大炊守の計らいでかねて揮毫した色紙を献上物として、二十八日に三代將軍・家光に謁見を果たしている。この時、家光は家臣に命じて即座に光室の倅又三郎の跡目相続を許し、光悦に対しても「寒き時分大義に下り候」「いよく養生いたし長生仕候へ、天下の重宝」と言葉をかけ、時服に銀子を与えたという。（『本阿弥行状記』第五一段）

光悦は謁見の翌日（二十九日）に中山法華経寺を参詣し、そのまま帰路についている。光悦の八十年の生涯のうちで江戸に下ったのはこの時が最初で最後であったが、光悦の中山来訪は、恐らく、亡き光室が父母の菩提を弔うために建てたという五重塔をひとめ見て、若くしてこの世を去った光室への手向とするためではなかったかと思われる。

光室は『本阿弥行状記』に「光室、台徳院様刀脇ざしの御目利御稽古を被成、毎日二時計りづゝ御指南申上げる。御座之間の御次にも人を置せられず、ぬき刀を御手より下され、御手へさし上げる、冥加至極のものなり。」（同第五六段）と記されるように、とりわけ二代將軍・秀忠の信任が厚く、三代將軍・家光にも仕えている。光室は死後、谷中の妙法寺に葬られたという。

2-4. 光悦筆の扁額について

中山法華経寺には光悦の筆になる「正中山」「祖師堂」「妙法花経寺」の扁額や、「通本」の小扁額が残されている。これらの額については、光悦と親交のあった本法寺の日慈上人が、中山十八世として晋山するにあたり、餞別代わりに送られたとする説（鶴田・前掲書）や、光室の急死を受けて、後処理の為に江戸に下向した光悦が、その時に書いたものであろうとする説（近藤喜博著「中山法華経寺と光悦」『書品二六』一九八二年、東洋書道協会）などがある。

2-5. 光悦の法華信仰について

藤井学著『法華文化の展開』によれば、光悦の法華信仰は、中山門流と本阿弥家の檀那寺本法寺を軸とする日親門流に限られたものであったという。

「寛永四年（一六二七）元旦の光悦の試筆が光悦寺に残っている。光悦の法華信仰の内容と、その信仰の結果として、彼が何を期待していたかを、この文書は明瞭に語っている。冒頭に首題を書いて、彼が信じ、憑依した対象を連記して、これに「南無」の二時を冠している。妙法蓮華経、多宝如来、釈迦如来、本化四菩薩、天台大師、妙楽大師、伝教大師、日蓮大士、六老僧（六人の日蓮の高弟）、日本国中上人、中山開山上人、代々上人、本法寺開山上人、代々本法寺上人とみえるのが、これである。このうち、日本国中上人までは、日蓮宗信者にとって、いわばいつも見られるもので、興味をひくのは中山開山上人以下の四列である。これを具体的にいうと、中山法華経寺開山の日祐とそれ以後の同寺の歴代貫首、本法寺開山日親とその後の同寺歴代貫首をさすものである。中

山法華經寺は日親が育まれた本山である。つまり、光悦の日蓮宗信仰は、中山門流と本阿弥の檀那寺本法寺を軸にする日親門流に限られた信仰だった。そして、光悦がこの信仰の帰結として期待しつづけたものが、この文書の後部に続けて記されている「天下一同仏法流布」「臨命終正念」「即身成仏」の三事である。いずれも日蓮教説を特色づける基幹的テーゼだったことはいうまでもない。

光悦の日蓮教説の理解は、正確にして意外に深い。日蓮の著作、すなわち日蓮御書について、その敷衍された講釈を僧侶から聴聞するような段階は、すでに光悦は越えていた。光悦は直接、日蓮御書に触れ、その内容も自分の見識で理解した。光悦が親交した本法寺貫首の功德院日通は、中山に秘蔵された日蓮御書をつぎつぎと筆写して、あの膨大な御書の全貌を、初めて洛陽諸門流の前に提示した碩僧の一人だった。この幸運にも恵まれた光悦は、御書またはその筆写体を眼前にする機会を得て、光悦は数々の日蓮御書の謹写を世に送り出している。」（※前掲書四二二～四二三頁）

2-6. 加賀藩と本阿弥家のかかわり

幕末には十二家を数えた本阿弥家のうち、加賀藩から知行を得ていた本阿弥家は二軒あり、そのうちの二軒は光悦の父光二に遡ることができるという。（横山方子著「本阿弥光悦の子孫と金沢」）光二の没後、光悦の代になると前田家との関係は更に深まり、光悦が加賀藩の重臣らとの間で交わした手紙が何通も残されている。

増田孝著『本阿弥光悦 人と芸術』によれば、「光悦がほぼその生涯にわたって、交友を持ち続けたのは加賀の前田家およびその家臣だった。前田家とのつながりが、父祖以来の家職を基盤とするものであったことは明らかであるが、光悦の手紙に見る著しい特色は、家職の刀剣に関する事柄は意外と少なく、もっぱら謡曲や茶事や書物の揮毫、贈答、手習いといった遊芸による親交が主であることである」という。

光悦は加賀藩臣に宛てた手紙の中で、利家を尊敬し「御憐愍のふかき君ゆゑ」「加賀能登越中には乞食と申者一人も無之」とその名君ぶりを称えているという。（横山前掲書）

〈参考文献〉

- ・光悦會編『光悦』芸艸堂、一九一六年。
- ・鶴田勢湖著「中山法華經寺の本阿彌歴代墓碑（供養）と本阿彌家のことどもに就いて」『掃苔』第十一卷第十二号、一九四二年。
- ・中山法華經寺誌編纂委員会編『中山法華經寺誌』一九八一年。
- ・日暮聖〔他〕訳注『本阿弥行状記』平凡社、二〇一一年。
- ・近藤喜博著「中山法華經寺と光悦」『書品二六』東洋書道協会、一九八二年。
- ・藤井学著『法華文化の展開』法蔵館、二〇〇二年。
- ・横山方子著「本阿弥光悦の子孫と金沢」『金沢大学文化財学研究』五号、二〇〇三年。
- ・増田孝著『本阿弥光悦 人と芸術』東京堂出版、二〇一〇年。